地方小出版 情報誌 アクセス

毎月1回　1日発行
購読料　定価150円（本体139円）
年間1,500円（税込み）
振替　00120-0-19017

発行所　㈱地方・小出版流通センター　〒162-0836　東京都新宿区南町20
編集　アクセス編集委員会　TEL.03-3260-0355　FAX.03-3235-6182

遅れ時計の出版社　編集工房ノア

全国の地方出版社の中でも少ない、関西で唯一の文芸専門出版社主が綴る、表現者たちとの熱い交わり模様、亡き文人たちを語る惜別のことば。

文・涸沢純平

この度出版した拙著『遅れ時計の詩人』は、サブタイトルを「編集工房ノア著者追悼記」としている。

帯の表には、

「全国の地方出版社の中でも少ない、関西で唯一の文芸専門出版社主・涸沢純平が綴る、表現者たちとの熱い交わり模様、亡き文人たちを語る惜別のことば。奥さんと二人の出版物語」

と当センター代表・川上賢一氏の言葉を貰った。

「関西で唯一」は、正確かどうかはわからないが、私は、褒詞として受けた。

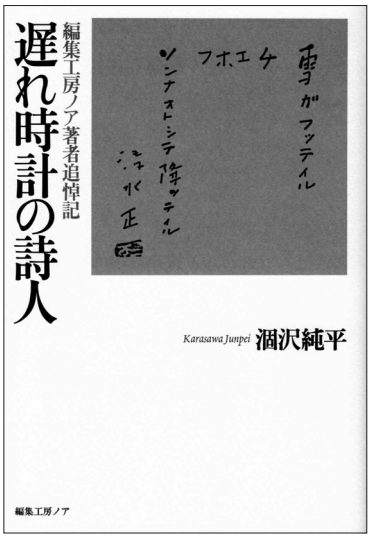
裏には、

「大阪淀川のほとり、中津の路地裏の出版社。港野喜代子、永瀬清子、清水正一、黒瀬勝巳、天野忠、大野新、富士正晴、東秀三、中石孝、足立巻一、庄野英二、杉山平一、桑島玄二、鶴見俊輔、塔和子。本づくり、出会いの記録」

と書き、この二つで内容を言い尽くしている。

私が１９７５（昭50）年９月、29歳で編集房ノアを始め、「関西での文芸出版社」を目指し、出会った詩人、作家たち。ひとりひとりを見送る度に、「かく逢った」「交わり模様」を綴った。社員がいた時期もあったが、妻との二人出版社である。出版とは「弔い事」だな、と思ったこともある。

最初は、港野喜代子（「落花さかん」）。大阪では名物詩人として知られたこの人の、二十年振りの詩集を出すことで、出版の突破口をと、期した。だが、出来上がったばかりの『凍り絵』を持って、二人で新聞社回りをした日の深夜、



涸沢純平著【遅れ時計の詩人－編集工房ノア著者追悼記】（本体価格2,000円・ISBN978-4-89271-281-4）

港野はひとり住まいの箕面の家の風呂で心臓マヒを起こして死んだ。家での密葬、庭に立つと桜がさかんに散った。司馬遼太郎氏は、「人中の花」の追悼文を自らすすんで書いた（「読売新聞」）。

港野の人脈が得られなくなって、私は詩人大野新の鋭利な文章を発見し、この人の本を出したいと思った。京都へ二年間通い、評論集『沙漠の椅子』を出版。

大野さんに連れられて、下鴨北園町九十三番地、路地の奥にある天野忠さんの家に行った。

天野さんは、詩集『讃め歌抄』の原稿を用意して待ちながら、「私を見て、『こいつ大丈夫か』という表情を露骨にされた」。が以後出版が続き、ノア出版の目鼻立ちとなる。没後の出版を含めると14冊出した。『私有地』で読売文学賞、『続天野忠詩集』で毎日出版文化賞を受賞した。

黒瀬勝巳とは、大野さんを主座とする京都の詩人の集まりで会った。同業編集者でもあり親しくなった。詩集『ラムネの日から』は新しい詩人の誕生と評価されたが、36歳で死んだ。黒瀬よ。

富士正晴さん、山田稔さん、島京子さん、ＶＩＫＩＮＧの人たちとは、同人で48歳で死去した大槻鉄男遺稿集『樹木幻想』の出版で縁を得た。太い流れとなる。

永瀬清子さんとは港野との友情つながり。死から五年後に出した『港野喜代子選集―詩・童話・エッセイ』の編集委員になってもらった。永瀬さんの『かく逢った』を出版。

足立巻一さん、清水正一さん、杉山平一さん、それに鶴見俊輔さんも、いわば死後の港野人脈といえる。

私は港野のことを母のようにも、清水正一さんのことは父のように思った。

「遅れ時計の詩人」は、清水さんのことを書いている。呼ばれて行った家の掛け時計はなぜか大幅に遅れていて、時間の感覚をなくす。すすめられるままに長居して「泊まっていったら。私ら朝、早いけど」と言われることもあった。私はこの大幅の遅れ時計が、日中立ちづめの商業蒲鉾屋の時間を詩人の時間にしたのではないかと思う。71歳で死去。長男は葬儀で「清潔な一生であったと思う」と挨拶した。その詩人の人柄。

詩人で大学教授であった桑島玄二さんのことを、私はなれなれしく「玄さん」と呼んだ。私たちは御神酒徳利と呼ばれもした。桑島さんは足立さんの弟分。

創元社の役員編集者東秀三さんも、

足立さんとつながる。元々文学青年でありながら、「編集者は文章を書いたらあかん」といましめ、退職後、作家に転じてからは、堰を切ったように5冊出版。62歳で亡くなった。

庄野英二さんの本、14冊。お酒のお供もして、「君といると気楽でいいわ」と庄野さん。つまり……。

大島青松園で一生を終えた、ハンセン病の詩人、塔和子さんの詩集も14冊出した。『記憶の川で』は第29回高見順賞を受け、全集三巻は、第22回梓会出版文化賞特別賞の対象となった。

鶴見俊輔さんの、「編集工房ノア二十五周年記念会」でいただいたスピーチ。

「ノアは十九世紀の出版を思わせる」「目鼻立ちがはっきりとしている」。十九世紀が何を意味するかわからないが、「十九世紀が二十世紀、二十一世紀に劣っているとは思わない」と鶴見さんは結んだ。

実は「あとがき」にも書いたが、本書は、還暦の時にまとめたのだが、決心がつかず、校正刷のままにしてあったのを、東さん、港野さんの62歳をはるか越え、清水さん71歳、足立さんの72歳を目前にして、思い切った。改めての追悼の思いもあった。ために記述は2006年までとなっている。

自著を自社で出すのは恥ずかしいが、中身はノアそのものなので、長年の同僚、小西敬子に発行人になってもらった。

その後の十年も残っているし、十九世紀、遅れ時計の出版も、もう少し続けていきたいと、本書を出して思っている。

＊

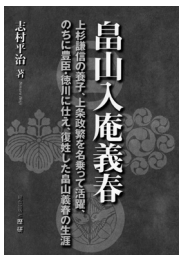
（からさわ じゅんぺい・編集工房ノア代表）

新刊ダイジェスト

※価格は税込（消費税率8%）表示です。

この「新刊ダイジェスト」のバックナンバーを弊社Ｗｅｂサイトにたくさん掲載してます。
機会がございましたらぜひご覧ください。アドレスは以下の通りです。
http://neil.chips.jp/chihosho/digest/index.html
＊検索サイトで「地方・小出版流通センター」とキーワード検索してください。

『畠山入庵義春』●志村平治著



畠山氏といえば、秩父平氏流である鎌倉幕府草創期の御家人・畠山重忠を思い浮かべる人が多いだろう。が、その遺領を継いだ清和源氏・足利氏の支族で室町幕府の管領家となった畠山氏の方が、日本の歴史に影響を及ぼした度合いは大きいだろう。何しろ応仁の乱勃発のきっかけを作ったのだから。それはさておき、義春についてである。戦国の世も終わりに近づく16世紀半ば、畠山氏の第一庶流・能登畠山氏の出身の義春は、長尾景虎（上杉謙信）の養子となる。さらに上杉氏一門の上条上杉氏を相続、名も上条政繁と改める。一般に知れ渡っているのはこの名の方だろう。御館の乱では景勝方についたが、次第に対立関係となり自ら出奔してしまう。背景には直江兼続との確執があったという。その後、秀吉・家康と時の権力者に仕え、江戸幕府の成立後は旗本として能登畠山氏を再興する。同じ謙信の養子でありながら景勝の影に隠れがちな政繁の生涯を豊富な史料で辿っていく。

◆2160・円・Ａ５判・127頁・**歴研**・東京・2017／８刊・ISBN9784865480566

『Touch the forest touched by the forest』●紀 成道著

この写真集のタイトルは「森にふれる、心にふれる」という意味だという。北海道・苫小牧（とまこまい）市のはずれにある開放的で居心地の良い広い森の中に、精神科病院がたっている。その患者たちは、この森の中で木漏れ日を浴びながら作業をし、遊び、暮らし、そして社会復帰へと一歩一歩足を進めている。『つらいことはみな森の風が連れ去ってくれるから』というように、患者それぞれに森の役割がある。人間と自然がふれあう接続域、当事者と健常者の共存域である森。両者互いの理解を助ける可能性の大きいこの森でのできごとを写真に残せたらと著者は言う。

こうして、上下左右、斜め、遠く近く、さまざまな視線をとおして、光と影が織りなす森の中の日常がえがかれる。風が森の木々や病棟をとおりぬけていくときの、人々のさりげないさまが、モノクローム写真をとおして表現される。

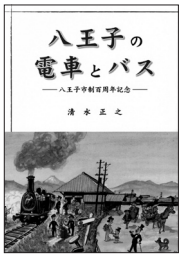
◆3780・円・208mm×264mm・92頁・**赤々舎**・京都・2017／５刊・ISBN9784865410686

『台湾原住民オーラルヒストリー　－北部タイヤル族「和夫」さんと日本人妻緑さん』●菊池一隆著

1960年代の台湾、国民党政権による戒厳令下の緊迫する政治状況の中、検問に怯えながらも15歳から10年間の文通を実らせて、北部タイヤル族の青年に嫁いだ日本人女性がいた。北部タイヤル族は台北の南、急峻な中央山脈に沿って居住する人口３万人余の原住民族である。著者はこの地に40年に及んで通い、インタビューという手法で、その近現代史を記録し続けている。本書は、日本人女性と夫への、結婚までの経緯と暮し、両家族のこと、及び、国民党政権による凶暴な「白色テロ」で弾圧を受けた人々への、伝統生活における戦闘組織、高砂義勇隊、日本植民地時代の対日抵抗、国民党政権による支配、キリスト教布教活動などのことの二部で構成される。異文化に順応し、監視体制にめげずに強く、朗かに生き抜いた女性の姿に感動する。インタビューは日本語で行われた。原住民同士は中国語や台湾語ではなく、現在も日本語を日常的に使っているとのことにも驚かされる。

◆2700円・四六判・280頁・**中国書店（集広舎）**・福岡・2017／9刊・ISBN9784904213506

『八王子の電車とバス　－八王子市制百周年記念』●清水正之著

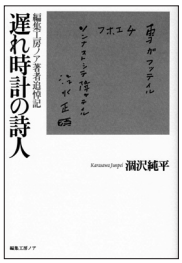


東京西郊の八王子は交通の要衝です。鉄道だけでも東西に中央本線・北に八高線・南に横浜線・東京都心との間には京王電鉄も走っています。そんな八王子市の鉄道とバスのあゆみを一冊にまとめたのが本書です。その核となるのは中央本線。私鉄の甲武鉄道としての開業当初から、戦争による被害、そして戦後の発展までが当時の写真などを交えて紹介されています。特産の生糸などを横浜港へ運ぶための横浜線や八高線も、かつてはローカル線でしたが、沿線開発が進み長閑な風景は完全に過去のものとなりました。それだけでなく京王電鉄御陵線や路面電車の武蔵中央電鉄等の廃止された鉄道の話にも筆は及びます。

そして鉄道と共に八王子の発展を支えたのがバスです。黎明期のバスは零細な会社が多く、地元の人々が資金をかき集めて事業を起こしているのが特徴的です。自社の車両をバックに撮られた記念写真からは、地域交通の担い手としての誇りも感じることが出来ます。

◆ 1296 円・Ｂ５判・84 頁・**揺籃社**・東京・2017 ／８刊・ISBN9784897083889

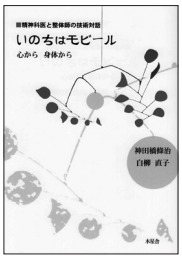
『遅れ時計の詩人　－編集工房ノア著者追悼記』●涸沢純平著



大阪は淀川のほとりにあり、1975 年に設立された文芸専門出版社、編集工房ノア。社主である著者と奥さんとの二人三脚で数多くの著作を世に送り出すと同時に悲しいながら、多くの表現者たちを見送ってきたことにもなる。本書はそんな彼らとの出会いや交流、別れを綴った追悼記である。ノアの最初の出版は港野喜代子詩集「凍り絵」だが、母のように慕っていた彼女は発刊後、半月ほどで急死する。港野との思い出を皮切りに、父のような清水正一、兄のような桑島玄二、東秀三、伯父のような足立巻一など、熱い記録は尽きない。蒲鉾を作りながら詩も書く話好きの清水宅に著者はよく呼ばれたが、いつも掛け時計が大幅に遅れていて、それを知りながらもつい長居をしてしまう。それがタイトルの由来。事務所の移転顛末記や創業 25 周年記念会など、ノアの歩みもわかり興味深い。旅立った人たちへ向けた眼差しと真摯に本づくりに携わってきた思いが静かに深く伝わって来る。

◆ 2160 円・四六判・287 頁・**編集工房ノア**・大阪・2017 ／９刊・ISBN9784892712814

『いのちはモビール　心から　身体から　－精神科医と整体師の技術対話』



精神分析医、神田橋條治氏と整体師、白柳直子氏による異色の対談集だが、精神心理療法における身体的アプローチに興味のある読者にとっては、またとない充実した内容となっている。二人のことを知らないとしても冒頭にある白柳氏による「神田橋先生の診療技法のまとめ」がまず参考になる。ここでは従来の精神分析の焦点となっている環境と個体間の齟齬、つまり抑圧された無意識の葛藤のことが「愛着障害」という言葉で表現されている。とともに「発達障害」および「双極性障害」という脳生理学的、資質的問題が診療における座標軸となっていることが理解できる。一方の白柳氏ついては第２章「整体技法の確立までのこと」において、試行錯誤の末に独自の整体技法にたどり着いた経緯を読み取ることができる。ここでの核心は、過去の大きな身体的ケガの「記憶」としての「癒着」という概念である。精神的不調の原因としての愛着障害と身体の慢性的不調の見えざる根である「癒着」を類比させながら本書を読む時、読者の興味はいや増すだろう。

◆ 2700 円・Ａ５判・212 頁・**木星舎**・福岡・2017/8 刊・ISBN9784901483964

売行良好書

期間：2017年9月15日～10月14日

［出荷センター扱い］ ※価格は税込（消費税率8%）表示です。

(1)『東京の森のカフェ』1404円・書肆侃侃房　(2)『図書の修理とらの巻』1404円・澪標　(3)『毒毒植物図鑑』1944円・南方新社　(4)『忘却の引揚げ史』2376円・弦書房　(5)『覚醒せよ、わが身体。』1944円・ハーベスト社　(6)『ぼくはこうやって詩を書いてきた』3024円・ナナロク社　(7)『獄中閑　我、木石にあらず』2700円・ＴＡＯ　ＬＡＢ　(8)『京近江の武将群像』1620円・サンライズ出版　(9)『アカデミック・ハラスメントの解決』2160円・寿郎社　(10)『玄洋社とは何者か』2160円・弦書房　(11)『赤ずきんとオオカミのトラウマ・ケア』1944円・アスク・ヒューマン・ケア　(12)『糖尿病は”砂糖”で治す！』1944円・鉱脈社　(13)『物語の森へ』3888円・東京子ども図書館

［三省堂書店神保町本店　センター扱い図書］ ※価格は税込（消費税率8%）表示です。

(1)『古典名作本の雑誌』1728円・本の雑誌社　(2)『昭和プロレスマガジン　４２』1000円・昭和プロレス研究室　(3)『本の雑誌　４１３号』720円・本の雑誌社　(4)『東京かわら版　１０月号』500円・東京かわら版　(5)『放射能が降る都市で叛逆もせず眠り続けるのか』1836円・白馬社　(6)『夏がとまらない』1080円・ナナロク社　(7)『東京の森のカフェ』1404円・書肆侃侃房　(8)『とりとめなく庭が』1512円・ナナロク社　(9)『ニホンという滅び行く国に生まれた若い君たちへ』1620円・白馬社　(10)『たべるのがおそい Ｖｏｌ．４』1404円・書肆侃侃房

［ジュンク堂書店池袋店　地方出版社の本―センター扱い図書］ ※価格は税込（消費税率8%）表示です。

(1)『図書の修理とらの巻』1404円・澪標　(2)『東京の森のカフェ』1404円・書肆侃侃房　(3)『糖尿病は”砂糖”で治す！』1944円・鉱脈社　(4)『「プーファ」フリーであなたはよみがえる！』1728円・鉱脈社　(5)『奥武蔵登山詳細図』950円・吉備人出版　(6)『認知症の私は「記憶より記録」』1620円・沖縄タイムス社　(7)『あひる』1404円・書肆侃侃房　(8)『井の頭公園いきもの図鑑』1728円・ぶんしん出版　(9)『出雲の古墳アドベンチャー』1620円・今井出版　(10)『英彦山の宗教民俗と文化資源』4320円・木星舎　(11)『旧鎌倉街道探索の旅２　中道・下道編』2700円・さきたま出版会

以下ホームページ等でも各種情報提供を行なっております。ご利用ください。
ＵＲＬ：http://neil.chips.jp/chihosho/　　ツイッター公式アカウント：@local_small

トピックス ―― ★★★

▼一昨年、韓国の地域出版や地域誌に関わる編集者、大学関係者、自治体の文化政策担当者等々視察団の方々が、鳥取県立図書館において地方出版文化功労賞表彰式および受賞記念講演会を視察をされ、その後、韓国版ブックイン「韓国地域図書展」並びに「韓国地域出版大賞」を起ち上げたとのことです。地方出版を顕彰するブックインとっとりの活動がさらに国際的に広がることを期待したいと思います。

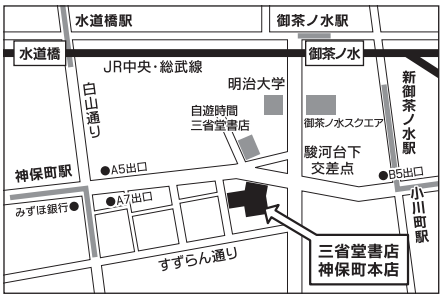
▼第5回古代歴史文化賞が発表される11月上旬に合わせて、本年も古代出雲ブックフェアが都内の大型書店にて開催される予定です。丸善丸の内店や八重洲ブックセンター、ジュンク堂書店池袋店等で予定されています。古代歴史文化賞は島根県、奈良県、三重県、和歌山県、宮崎県が主催で、最近発行された書籍のうち、日本の古代世界を学術的基盤に立ちながら、一般読者にわかりやすく書かれたものを表彰するというものです。

▼「冥途への道は坂道で舗装していないンだ」という嘆きの句を残して、詩人、藤富保男さんが9月初旬に亡くなりました。当センター扱いの詩の出版社、あざみ書房社主で、H氏賞を受賞した高階杞一著【キリンの洗濯】などを出版し、御一人でなさっていました。89歳と16日の生涯でした。ご冥福をお祈りいたします。

郵便販売のご注文方法

◎お名前、お届け先（郵便番号、住所）、連絡先お電話番号、ご注文品の書誌名、冊数の必要事項を明記のうえ、下記までＦＡＸでご連絡ください。
◎送料は、冊子小包・メール便共実費でお送りさせて頂きます。基本的にメール便は、一冊２１０円でお送り致します。（メール便の到着は、発送してから３～４日かかります。）お急ぎの方、その他ご要望がございます場合はお気軽に下記までお問い合せ下さいませ。
◎なお書籍お買上総計（税抜き価格）が5,000円以上の場合は、送料をサービスさせて頂きます。

★地方・小出版流通センター
ＦＡＸ：０３－３２３５－６１８２

地方・小出版物のデータになります。綴じて保存してください。

BOOKS SANSEIDO
三省堂書店
営業のごあんない
神保町本店 ４階
地方出版・小出版物フロア
営業時間　10：00 AM～8：00 PM
〒101-0051 東京都千代田区神田神保町1-1
TEL. 03-3233-3312(代)
URL. http://www.books-sanseido.co.jp
本店4階売場では、地方・小出版流通センター扱いの新刊全点のほか、地域別に書籍を取り揃えております。また、地域ならではのタウン誌、趣味の雑誌も扱っております。